

自閉スペクトラム症児（者）をもつ養育者の子育てに伴う感情 に関する臨床心理学的研究

中 村 恵里奈

問題・目的

2005年に発達障害者支援法が施行され、また、2007年には特別支援教育制度が開始された。それに伴い、発達障害のある当事者だけでなく、その養育者や家族を視野に入れた支援の必要性が認識されるようになった（山根，2010）。

発達障害の中でも、知的な遅れを伴わない自閉スペクトラム症/自閉症スペクトラム障害（Autism Spectrum Disorder：以下、ASDと記す）児（者）をもつ養育者は、診断告知前から診断告知時、障害認識の過程において、両価的な感情や、揺れ動く感情を抱いており、非常に複雑な感情を経験しながら子育てを行っていることが見出されている（松下，2003；矢部・都築，2010；柳楽・吉田・内山，2004）。しかし、先行研究ではASD児（者）の養育者が、揺れ動く複雑な感情を、子育ての中でどのように経験しているのかを時間継列にしたがって質的に明らかにしているものは少ない。

また、先行研究では診断告知時や障害認識などに視点をあてて、その時々部分的な感情を明らかにしているものは見られるが、「子育て」という視点から、子育ての妊娠中から現在といったプロセスに伴う感情を明らかにしているものは見られない。加えて、先行研究のほとんどが母親を対象としており、父親の感情について明らかにしている研究は少ない。

診断告知、障害認識などを含め、様々な困難さに出会うことが予想される子育ての中で、養育者（父親・母親）はどのような感情を経験しているのだろうか。

そこで本研究では、ASD児（者）をもつ養育者（父親・母親）が、妊娠中から現在に至るまでの子育ての中で、どのような感情を経験しているのかについて、現象学的アプローチを用いて、研究協力者の経験を基にしながら質的に明らかにすることを目的とする。

方法

調査時期：2014年9月～2014年10月

研究協力者：自閉症スペクトラム障害と診断されたX（12歳）の養育者（X-Fa・X-Mo）と、高機能広汎性発達障害と診断されたY（19歳）の養育者（Y-Fa・Y-Mo）の、2組の夫婦。

（なお、本研究においては、自閉症スペクトラム障害、高機能広汎性発達障害を包括した概念として「ASD」という用語を用いることとした。）

インタビュー内容：どのような気持ちで子育てをしてきたのかを、過去を振り返りながら（妊娠中、出産時、保育園入園前、保育園入園後、就学まで、小学校、中学校、高校など）インタビューした。

分析方法：現象学的アプローチ（ジオルジ，2004/2013）による分析。

結果・考察

養育者の叙述（ジオルジ，2013）より、ASD児（者）をもつ養育者の子育てに伴う感情について、5つのテーマが見出された。

研究協力者の言葉を『イタリック体』で表記する。

①子育ての中で感じる子どもへの疑問や違和感—スペクトラムの中での子育て— 養育者達は、子どもが生まれてから、次第に子どもへの疑問や違和感を抱くようになっていったが、同時に子どもの「普通」の面も認識しながら子育てを行っていた。ASDのスペクトラムの中で子育てをしていると、子どもの障害特性に気づくことは難しく、「普通」の面もあると思い、障害を見逃してしまう危険性があることが示唆された。そして、その気づきの難しさは結果として、不登校などの二次障害として現れてしまい、養育者達は大変さや自責感、落差などを経験していた。子育ての中で小さな疑問や違和感を抱いた時点で、適切な人に相談できるような支援体制を整えることが重要であることが見出された。

②障害の告知に伴う感情—母親と父親の相違—

障害告知の受け止め方は、母親と父親では異なっていた。例えばY-Moにとって障害告知は、まるで『心霊状態』を信じろと言われているような感覚で経験されていた。それは段々と、腹立たしさや苛立ちへと変化し、『なんでうちの子なのよ』と受け入れられなさを感じながらも、でも『もうそれに向き合っていくしかない』という気持ちも感じており、両価的な感情を経験していた。そのような感情を経て、現在では『開き直る』ことで発達障害と向き合おうとしていた。一方、父親(X-Fa, Y-Fa)にとって障害告知は、子どもを正式に理解させてくれるものであり、今までの疑問を払拭し、納得させてくれるものであった。また、子どもの理解を深めてくれるものであり、二次的に生じた不登校を許容する気持ちを抱かせるものでもあった。

③障害告知後の子育ての中で感じる感情—子どもの成長、二次障害(不登校)に対する感情、父親の感情— 子どもがASDであると知った後の子育ての中で、養育者達は、子どもの心の強さや、子どもの行動面の変化など、子どもの「成長」を実感しながら子育てを行っていた。X-Moは、そのような子どもの成長を感じるためには、『長あぁーい月』で『どしと構え』ておくことが大切であると語った。

また、母親達は子どもの不登校や、子どもが家の中で暴れるといった「二次障害」という困難さに出会っていた。X-Moは、不登校の子どもと24時間一緒に過ごす中で、子どもの気持ちを同じように『思い感じ』たり、『一緒にいる分、なんか余計に』子どもへの想いをつのらせたりしていた。また、24時間一緒に過ごす中で、障害特性に合わせた関わりの難しさを日々積み重ねており、それは子どもとの『バトル(子どもが家の中で暴れることにX-Moが応戦すること)』へと発展していた。『バトル』をしている最中は、感情的になり、『虐待してるんじゃないかな』と感じることもあった。また、Y-Moにとって子どもの不登校は『お母さんのプライド』を揺るがす出来事でもあった。母親のみが二次障害に関する困難さを語っていたことから、父親に比べて母親の方が二次障害に対する困難さを感じており、育児ストレスも大きいことが示唆された。

一方で父親は、母親が子どもとの関わりの中で困難さを感じている姿を認識していた。X-Faは

母親の精神的負担を認識しながらも、会社に行かなければならず、家庭と会社との『板挟み』状態であった。その『板挟み』状態の中で、父親は愚痴を吐くことも出来ずに、辛い経験をしていた。母親だけでなく、父親の精神的負担についても考慮し、支援していく必要性が見出された。また、父親支援の際には、発達障害の理解を促すような支援も重要になることが示唆された。

④子どもの将来 養育者達は、親なき後の子どもの将来について考えていた。Y-Moは子どもを『独り立ち』させることが『親の責任』であると感じていたが、それには、子どもを『投げ出すみたいで可哀想な気もする』が、『やっぱりそれもしないといけないのかなあ』という葛藤が伴っていた。子どもが『独り立ち』できるように、子どもの進学や就労支援等に取り組むことの重要性が示唆された。

⑤ASD児(者)の子育てから得られたもの—一人生への意味づけ— 養育者達は、ASD児(者)の子育てを通して、子ども以外の発達障害児(者)への理解を深めたり、『どしと構えて見ている自分』になることができたり、発達障害について勉強する機会を与えられていると感じていた。養育者達は、ASD児の子育てを通して、自己成長を体験したり、有益な側面を見出したりして、ASD児の子育てという経験を自分の人生に意味づけしていた。過去を振り返り、大変な苦渋の中で子育てをしつつも、子育てから得られたものは養育者にとってかけがえのないものになっていることが考えられた。

臨床心理学的意義

本研究では、現象学的アプローチを用いることによって、子育てに伴う複雑な感情を質的に明らかにすることができた。養育者の感情一つひとつを丁寧に理解することで、養育者の感情に敏感であることができ、そしてその感情に寄り添う姿勢をもって支援することが可能になるのではないだろうか。

また、本研究の結果より、養育者支援において、子育ての中で小さな疑問や違和感を抱いた時点で適切な人に相談して早期に発見することや、子どもが将来『独り立ち』できるように進学や就労等についての支援体制を整えておくことなど、長期的な支援が必要であることが見出された。